

「日本語観国際センサス」データの公開と利用

鎌水 兼貴 (国立国語研究所 研究情報発信センター)

本発表は、国立国語研究所が1990年代に実施した日本語に関する国際的調査「日本語観国際センサス」のローデータ公開について、データ内容の紹介と利用方法について、展望を示すものである。「日本語観国際センサス」のデータの特徴は、調査対象国すべてでランダムサンプリングによって調査対象者を選んでいることである。20年前のデータという問題はあるが、今後調査を実施する際に、非常に有用なデータといえる。

Publishing and Using Database of "International Census on Attitudes Toward Japanese"

Yarimizu Kanetaka

(Center for Research Resources, National Institute for Japanese Language and Linguistics)

In this research, I introduce the data of the international survey, "International Census on Attitudes Toward Japanese (ICAT-J)" conducted by National Institute for Japanese Language and Linguistics in the 1990s, and the method of using the data. In the data of "ICAT-J", informants are selected by random sampling in all countries.

It is a problem that the data is old, but it is very useful when conducting a survey in the future.

1. はじめに

本発表は、国立国語研究所が1990年代に実施した日本語に関する国際的調査「日本語観国際センサス」のローデータ公開について、データ内容の紹介と利用方法について、展望を示すものである。

1990年代は、アジア地域を中心に日本語学習者が急増した時期であった[1]。1993年に160万人だった日本語学習者は、5年後の1998年には210万人と、日本語の需要が高まりつつあった。

そんな中、国立国語研究所を中心に、「ただ単に今日の日本語使用の広がりとその未来を見通すためだけのものではなく、もう一段踏み込んで日本語を国際的に普及させるための政策的観点も視野に入れて」[2]、「国際社会における日本語についての総合的研究」(1994~1999年度文部省科学研究費補助金(創成的基礎研究費)、研究代表者・水谷修)が立ち上げられた。

この研究の一環として実施されたのが、日本語に関する国際比較調査「日本語観国際センサス」である[3]。

2. 「日本語観国際センサス」とは

「国際社会における日本語についての総合的研究」の一環として実施された「日本語観国際センサス」について、『暫定速報版』報告書[4]では、「国際比較調査における客観的資料をもとに、現時点での各国の人々の日本語観(イメージ)を、各国での母語観および英語観と対比させながら、国際社会における今後の日本語の役割と位置を

予測する」という学術的考察を行い、さらに言語政策立案のための基礎資料を得ようとする」と述べられている。

調査項目は、言語使用状況と言語イメージ(母語、学習外国語、英語、日本語について)が中心で、今後必要な外国語、日本語の学習環境、日本のイメージ、日本人のイメージ、価値観(統計数理研究所の「日本人の国民性調査」項目)についても調査している。

この調査の最も重要な点は、科学的検証に耐えうる調査結果を得るために、調査対象のすべての国(地域)で、ランダム・サンプリングによる調査対象者の抽出を行っている。約60億人(調査当時)の地球全体の代表性を目指すことは困難であり、調査国(地域)は、欧米とアジアに偏っている。これは日本の置かれた環境からは止むを得ないと思われる。

以下、調査概要である。

調査時期：1997年1月~1998年8月

調査国(地域)：28の国と地域(以下「国」と表記)

表1参照

調査対象：当該国に市民権を有する15~69歳の男女、約1,000人(中国と日本は約3,000人)。合計32,471人

調査方法：多段階層化法によるランダム・サンプリングによって調査対象を抽出し、個別面接法によって調査

調査機関：Gallup International Group(株)日本リサーチセンターが幹事会社(モンゴルはモンゴル国立大学、中国は中国人民大学、日本は財

新情報センター)
調査対象地域：全国（10ヶ国では地域を限定）

表1・調査国(地域)一覧

調査対象国(地域)	調査票の言語	調査対象地域	サンプリング法	地点抽出の為の使用データ	有効回収数
アメリカ	英語	全国	エリア・クオータ	センサス	999
ブラジル	ポルトガル語	全国	エリア・クオータ	センサス・マップ	1076
アルゼンチン	スペイン語	全国	エリア・クオータ	センサス	1110
韓国	韓国語	全国	エリア・クオータ	センサス	1000
オーストラリア	英語	全国	エリア・クオータ	選挙区リスト	1024
シンガポール	英語, 中国語	全国	クオータ	電話帳	1027
タイ	タイ語	全国	エリア・クオータ	人口データ	1000
イギリス	英語	全国	エリア・クオータ	地区一覧	1014
フランス	フランス語	全国	エリア・クオータ	統計経済局データ	1047
ドイツ	ドイツ語	全国	エリア・クオータ	ADM網	998
オランダ	オランダ語	全国	エリア・クオータ	自社CAPIデータ	1008
ハンガリー	ハンガリー語	全国	エリア・クオータ	人口統計	1066
イタリア	イタリア語	全国	二段無作為	選挙人名簿	1032
スペイン	スペイン語	全国	エリア・クオータ	センサス	1000
ポルトガル	ポルトガル語	全国	エリア・クオータ		967
ロシア	ロシア語	全国	エリア・クオータ	住民台帳	1042
イスラエル	ヘブライ語, アラビア語	全国	民族別エリア・クオータ	センサス	1000
インド	英語, ヒンディー語, ベンガル語, マラーティー語	3大都市: ニューデリー, ムンバイ, カルカッタ	エリア・無作為	センサス	1000
インドネシア	インドネシア語	3大都市: ジャカルタ, スラバヤ, バンドン	エリア・クオータ	住民台帳	1006
フィリピン	英語, フィリピン語	メトロマニラ	エリア・クオータ	センサス	1000
ベトナム	ベトナム語	4大都市: ハノイ, ダナン, ホーチミン, ハイフォン	エリア・クオータ		1000
モンゴル	モンゴル語	7地域: ウランバートル, ダルハン, エルデネト, ドルノト, アルハンガイ, ホブド, ウムヌゴビ	エリア・クオータ	人口統計(一部センサス)	1002
トルコ	トルコ語	5大都市: イスタンブール, アンカラ, イズミール, ブルサ, アダナ	エリア・クオータ	センサス	1010
ナイジェリア	英語, ハウサ語, ヨルバ語, イボ語	5大都市: ラゴス, エヌグ, イバダ, カノ, ジョス	多段無作為	センサス	1001
エジプト	アラビア語	2大都市: カイロ, アレキサンダリア	多段無作為	センサス	1037
台湾	中国語	台北, 台中, 台南, 高雄の各市・周辺部	エリア・クオータ	里(ii)の住民台帳	1138
中国	中国語	全国100都市部	エリア・クオータ	センサス	2917
日本	日本語	全国	多段無作為	住民基本台帳	2950
計					32471

調査項目を表2に示す。調査票は、英語版から各国の使用言語に翻訳された同一の調査票を用いて、個人面接による調査を実施した。

3. データの整備と公開

国立国語研究所では「日本語観国際センサス」データ（以下「国際センサスデータ」）の活用を目指し、2018年9月19日に研究所のサイト[6]よりローデータを公開した(図1)。

https://mmsrv.ninjal.ac.jp/n_census/

データは、Excel ファイルとタブ区切りファイルの2形式によって提供されている。

調査から20年経過した「日本語観国際センサス」は、基礎的な集計結果だけでは、利用価値は低いといわざるをえない。研究者が、それぞれの興味で利用可能な部分を取り出して分析できるように、データを公開する必要である。これにより、属性や項目ごとのクロス集計が可能となる。多変量解析をはじめとする、高度な解析法を適用することもできる。

「日本語観国際センサス」は、言語調査としては、過去に例のない大規模な調査であった。国内で多くの大規模調査を実施してきた国立国語研究所であっても、28か国の調査会社から返却されたデータの点検作業と、相互データの調整作業に膨大な人員と時間を要することになった。

1999年3月には『暫定速報版』の国別単純集計表が出版され、2000年代前半には「行動計量学」特集号[2]をはじめとして多くの研究成果が出された。また、2000年には井上史雄の書籍でも紹介された[5]。しかし研究組織が解散して以降、インターネット上で国別の単純集計と、各国別の2属性（年齢層、性）のクロス集計表が公開されたものの、ローデータの公開には至らないまま、現在まで活用されない状態にある。

国際センサスデータのサイズは、32,471人×331項目である。1990年代末当時のPCの水準では、データ管理、数量的解析ともに制約があった。

当時PCでデータ管理に使用されていたMicrosoft Excel 98では、ワークシートの最大サイズが65536行×256列であったが、32,471人×331項目のデータは1枚のシートに収めることができなかった。当時の解析ソフトでも、解析時にデータ数の制限が存在するものが多く、全データを一度に取り扱う研究は容易ではなかった。

集計データの時点で分量が多く、内容に興味があったとしても、扱いにくかったと思われる。ロ

図1・ダウンロードサイト

表2・「日本語観国際センサス」調査項目

フェイスシート	「英語」に関する調査項目	「日本」に関する調査項目
調査国(地域)	Q18 世界で英語が優位であると思うか	Q42 日本への訪問経験
F2 性別	Q19 世界で英語が優位であることに対してどう思うか	Q43-1 日本での滞在期間(年数)
F4 年齢	Q20-1 英語の能力/読解力	Q43-2 日本での滞在期間(月数)
F7 就学年数	Q20-2 英語の能力/会話力	Q43-3 日本での滞在期間(日数)
	Q21-1 英語の上達意向/読解力	Q44 日本への訪問意向
言語環境	Q21-2 英語の上達意向/会話力	Q45a 日本へのイメージ/豊か-貧しい
Q1 母語	Q22a 英語のイメージ/きれい-きたない	Q45b 日本へのイメージ/近代的-伝統的
Q1b 母語で教育を受けたか	Q22b 英語のイメージ/簡単-難しい	Q45c 日本へのイメージ/民主的-非民主的
Q2 生活言語(1位-5位)	Q22c 英語のイメージ/軽快-重苦しい	Q45d 日本へのイメージ/信頼できる-信頼できない
Q3 読み書きに使う言語(1位-5位)	Q22d 英語のイメージ/聞きやすい-聞きにくい	Q45e 日本へのイメージ/理解しやすい-理解しにくい
Q4 子供の頃、父親と話した言語(MA)	Q22e 英語の好き嫌い/好き-嫌い	Q45f 日本への好き嫌い/好き-嫌い
Q5 子供の頃、母親と話した言語(MA)		Q46a 家族と日本について聞く/話合う程度
「英語」に関する調査項目	「日本語学習」に関する調査項目	
Q6a 母語のイメージ/きれい-きたない	Q23 日本語学習の経験の有無	Q46b 友人と日本について聞く/話合う程度
Q6b 母語のイメージ/簡単-難しい	Q24 日本語を習った国(MA)	Q46c 勤め先・学校で日本について聞く/話合う程度
Q6c 母語のイメージ/軽快-重苦しい	Q25 日本語をどのように学んだか(MA)	Q47 自国で日本について読む・見る・聞く場面(MA)
Q6d 母語のイメージ/聞きやすい-聞きにくい	Q26-1 日本語学習の期間(年数)	Q48a 日本との交流を盛んにするべき内容/経済的交流
Q6e 母語の好き嫌い/好き-嫌い	Q26-2 日本語学習の期間(月数)	Q48b 日本との交流を盛んにするべき内容/スポーツの交流
Q7 自国で外国人と話す時の母語使用意向	Q27 日本語学習意向/継続の有無	Q48c 日本との交流を盛んにするべき内容/政治的交流
Q8 自国で外国人と話す時の母語使用の有無	Q28 日本語学習意向/継続の理由(MA)	Q49 日本に関する接触経験(MA)
Q9 母語の読解力	Q29-1 日本語の上達意向/読解力	
	Q29-2 日本語の上達意向/会話力	「日本人」に関する調査項目
言語一般に関する調査項目	Q30 日本語学習が役立つ程度	Q50a 日本人のイメージ/勤勉-怠惰
Q10 今後世界のコミュニケーションで必要となる言語(MA)	Q31 自国での日本語学習の障害(MA)	Q50b 日本人のイメージ/謙虚-傲慢
Q11 今後自国のコミュニケーションで必要となる言語(MA)	Q32 日本語ができる自国の知人の有無	Q50c 日本人のイメージ/親しみやすい-親しみにくい
Q12 子供に習わせた言語(MA)	Q33 日本語ができる自国の知人の国籍(MA)	Q50d 日本人のイメージ/理解しやすい-理解しにくい
「外国語」に関する調査項目	Q34-1 日本語の能力/読解力	Q50e 日本人のイメージ/信頼できる-信頼できない
Q13 「外国語」で思い浮かぶ言語	Q34-2 日本語の能力/会話力	Q50f 日本人の好き嫌い/好き-嫌い
Q14-1 今までに習った外国語(MA)		Q51a 賛否/日本人と結婚する
Q14-2 現在習っている外国語(MA)	「日本語」に関する調査項目	Q51b 賛否/日本人の先生に教わる
Q14-3 今後習いたい外国語(MA)	Q35 自国内で日本語を見た/聞いた経験	Q51c 賛否/日本人がすぐ隣に住む
Q14-4 最も習いたい外国語	Q36 自国内で日本語を見た/聞いた場所(MA)	Q51d 賛否/日本人がレストランで隣に座る
Q15 その外国語を習いたい理由(MA)	Q37 日本語の識別程度	Q51e 賛否/日本人の上司のもとで働く
Q16-1 最も習いたい外国語の能力/読解力	Q38 見た/聞いたことのある日本語(MA)	Q51f 賛否/日本人を部下として使う
Q16-2 最も習いたい外国語の能力/会話力	Q40a 日本語のイメージ/きれい-きたない	Q52 日本人の識別の有無
Q17-1 最も習いたい外国語の上達意向/読解力	Q40b 日本語のイメージ/簡単-難しい	Q52b 日本人の識別方法(MA)
Q17-2 最も習いたい外国語の上達意向/会話力	Q40c 日本語のイメージ/軽快-重苦しい	
	Q40d 日本語のイメージ/聞きやすい-聞きにくい	「価値観」に関する調査項目
	Q40e 日本語の好き嫌い/好き-嫌い	Q53 ソップ童話に対する意見
(MA) … 複数回答	Q41 話題にする時に日本語を使うと便利な事柄(MA)	Q54 物事を決定する時に求める人格
		Q55 一緒に仕事をしたい課長

ーデータの公開を求める声がなかった一因であろう。

前述のように、集計データでは利用価値が低いというだけでなく、この20年の技術の進歩で、巨大なデータを比較的容易に扱えるようになった。国際センサスデータのExcelファイルは38MBである。現在でも軽快にデータの閲覧ができるわけではないが、分析が困難というほどでもない。統計ソフトについても、Rによって高度な解析が無償で入手可能になった。

世界規模の調査という点では、20年前のデータであっても、公開される意義は大きいだろう。一方で、データ公開に際して、「日本語観国際センサス」自体の意義についても考えなおす必要がある。

4. データの位置づけ

(1) 日本語を取り巻く状況の変化

データ公開が遅れている間に、日本語を取り巻く状況は大きく変化した。日本語学習が盛んになった調査開始時期は、バブル崩壊後の経済低迷が認識され始めた時期でもあった。

その後も日本経済が回復が遅れる中、1990年代からの改革開放政策により、著しい経済発展をとげた中国が、2010年に国内総生産(GDP)で日本を追い抜いた[7]。また、学術研究においても、学術論文数の日本の低下が問題になっている一方

で、こちらでも中国が台頭している[8]。

こうした、経済、学術における日本の地位の低下は、日本語の地位にも大きな影響を及ぼしており、現在はアジアにおける日本語学習者は減少傾向にある[1]。

日本語に関する調査として、「日本語観国際センサス」は依然として貴重なデータではあるものの、調査から20年を経て、当時の「日本語の国際的普及」を目的としたデータとしての有用性は失われている。現代においては、経年比較研究に有用なデータとして、価値を見直す必要がある。

(2) データの資料的価値

国際センサスデータの現時点の意義について考える。

国際センサスデータは、日本語の過去の世界における位置づけがわかる、という点だけでも意義がある。しかし、データには日本語以外にも、母語や学習外国語、英語に関する調査項目も含まれている。

これらは日本でのみ重要なデータではない。今回データを公開することにより、日本以外の27か国の20年前の言語意識データが分かるという点も意義がある。

さらに、ただ20年前の調査データがあるのではなく、「日本語観国際センサス」調査は、すべての国でサンプリング手法を用いた標本抽出がなされているということが重要である。

調査を実施した 28 か国中、18 か国は全国でのサンプリング、10 か国は主要都市におけるサンプリングと、すべての国のデータが、統計的に国全体を代表しているデータではない。しかしサンプル抽出の手法は公開されており[2]、将来、それぞれの国で、同一の手順を経た調査を実施することにより、20 年前と統計的に比較可能な調査データになる。

自国の統計的に比較可能な 20 年前のデータを得ることは容易ではない。過去の調査が精密であればあるほど、現在の調査と比較しやすい。

「日本語観国際センサス」のデータは世界規模の過去の言語使用・言語意識の状態が発掘できる資料と考えることができる。

5. データの利用方法

(1)年齢差の研究

国際センサスデータの利用方法は、20 年前の調査ということもあり、どうしても「今後経年調査を実施する際の先行研究」としての位置づけになってしまう。そのため、現状のデータだけでも分析意義のある項目について考える。

センサス調査は 15~69 歳を対象としている。この 20 年間の世界の情勢変化を考慮入ると、経年調査をしないと分析できない項目が多い。

しかし中には一時点における年齢差を変化過程とみなせる項目もある。例えば、「見たり/聞いたりしたことのある日本語」(問 38)のような項目は、単語の知識であり、現在でも分析可能な項目といえる。

また、年齢という点では、調査が実施された 1997~98 年は、戦後 52~53 年に相当する。すなわち 60~69 歳の調査対象者は終戦時に 7~17 歳ということになる。「言語形成期」に入っており、戦前の言語状況がある程度は意識できる世代といえる。

現在調査を実施しても得ることがほぼ困難な世代のデータである、という点も強調できるであろう。

(2)英語観の研究

つづいて、先行研究として利用する場合に有用な研究について述べる。

第一に英語観の研究である。英語に関する質問は、外国語学習の項目と合わせて、日本語項目以外に重要な位置を占める。

1990 年代は、フィリピン[9]をはじめとした「英語帝国主義」「言語帝国主義」の研究が盛んになった時期である。1990 年代後半にな

るとインターネットの登場により、英語母語話者の世界的な優位性がさらに問題になった。グラッドル[10]では、ブリティッシュカウンシルによる英語が世界語であることへの賛否のデータが掲載されている。簡単なアンケート調査のように思われるが、国際センサスデータは信頼性の点で有利である。

1990 年代時点の英語の位置づけを知ることができるため、現代における調査と組み合わせる意義がある。

(3)母語項目を利用した英語以外の研究

日本語、英語以外の言語でも、母語項目を利用することで、言語イメージの研究が可能である。

国際センサスデータには EU 諸国が多く含まれる。EU は 1993 年に旧 EC から発展して成立した。1989 年の旧共産圏の崩壊後、15 カ国だった EU は、2004 年(10 カ国)と 2007 年(2 カ国)に東欧諸国が一挙に加入し、27 カ国に急増した。

国際センサスが実施された 1997 年は、東欧諸国加入前の状況であり、調査された各国で今後調査を実施すれば、比較データとして有用である。EU におけるフランス語やドイツ語の位置づけに関する研究などが可能である。

このほか国別に考えると、ハンガリーは東欧諸国で唯一の調査対象国であり、経年調査による比較がしやすい。アメリカにおけるスペイン語の位置づけや、ポルトガルとブラジルにおけるポルトガル語などは、今後各国で経年調査を実施することによって、研究を期待できる。

(3)中国語観研究

アジアにおける研究としては、中国語観の研究が重要であろう。中国の経済発展により、ビジネスにおける中国語の需要が高まっており、国際センサスデータにおいて 1996 年時点の中国語の状況がわかることは、非常に重要である。

国際センサスデータにおける研究として、吉野ほか(2003)は、アジア地域における日本語、英語、中国語の位置づけについて、多変量解析を用いて分析している。

アジアは中国語の影響が強い地域(香港、台湾、シンガポール、マレーシアなど)と、英語の影響が強い地域(香港、フィリピンなど)があり、その間で日本語がどう影響を与えているのかについて、研究を継続する意義があるだろう。

(4) 経年調査の可能性

「日本語観国際センサス」のような大規模研究を個人で実施することは難しいが、一部項目であれば、調査をすることは可能である。

例えば、中央調査社の「個人オムニバス調査」[11]を用いると、サンプリング手法も含め、国際センサスデータに近いデータを得ることができる。

国際センサスデータの公開によって、具体的な調査票の質問文も知ることができる。経年調査において、まったく同じ文言による質問は必須である。前述(2)(3)においても、日本語以外の各国の調査票の公開が必要である。

6. データの問題点

前節では、国際センサスデータの現時点での利用可能性について述べた。多くは今後実施する調査と比較するための先行研究という位置づけであり、国際センサスデータ単体で有意義な分析を行うことは容易でないことは、認めざるをえない。その点では、現在の調査結果と勘違いして利用されることがないように、注意する必要があるだろう。

国際センサスの調査票は、分量が限られている中で、少ない質問数で大きい効果を得る工夫がなされているが、そのために一部に体系的に欠ける点がある。

たとえば、言語使用能力では、「読解力」と「会話力」の質問があるが、母語のみ「読解力」(問9)しかないため、英語、日本語と比較できない。また、「最も習いたい外国語」では、能力(問16)・上達意向(問17)について日本語・英語と比較できる、言語イメージはないので比較できない。日本語・日本・日本人項目について、イメージ調査(問40,45,50)はそろっているが、接触経験や識別については統一されていない。細かい点ではあるが、期待した項目がないのは残念である。

7. 今後の展開

最後に、国際センサスデータについての今後の展開について述べる。

(1) データの存在の周知

データの公開によって、「日本語観国際センサス」の存在が知られ、その価値が高まるようにしたいと考えている。

データはすべて数値化されており、コードも28か国共通である。各国版のコード表が必要となるが、各国の調査票は英語版からの翻訳であるため、まずは英語版のコード表を作成し、つづいて各国版の調査票を公開することによって、データの世界的に利用が可能となる。今後は現在の公開サイト[6]における英語ページの拡充なども必要であろう。

(2) 未公開の属性データの整備

国立国語研究所には、当時の全調査票が保管されている。公開予定のデータでは、被調査者の持つ属性情報は、国、性別、年齢、就学年数である。現状のデータ公開だけでも意義は大きいと考えるが、使用言語の多い国で母語意識などを考える上では、調査地点情報も重要と考える。

特に被調査者数が3,000人と非常に多い中国と日本においては、調査地点情報(日本では出身地情報もコード化されている)と他の属性情報を組み合わせても分析に十分耐えうると思われる。

(3) グラフ・集計表の動的生成

単に20年前の調査のデータを公開しただけでは、その内容を見たいと思う人は少ない可能性がある。これまで公開されていた単純集計表は、個々のファイル(Excel形式とPDF形式)であったため利便性が低かったが、ブラウザ上で動的にグラフを生成するなど、可視化を容易にすることにより、多くの人々に興味をもってもらう必要があるだろう。

今後も「日本語観国際センサス」データの情報拡充を行い、データの重要性について発信していきたいと考えている。

参考文献

- [1] 国際交流基金. “2015 年度海外日本語教育機関調査結果（速報値）”.
<http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/>,
(参照参照 2018-09-07).
- [2] 計量行動学会編. “計量行動学「特集「日本語観国際センサス」”, 30 巻 1 号.
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jbhmk/30/1/_contents/-char/ja, (参照 2018-09-07).
- [3] 国立国語研究所. “新プロ「日本語」”.
<http://www2.ninjal.ac.jp/jalic/index-j.html>,
(参照 2018-11-01).
- [4] 新プロ「日本語」総括班, 研究班 1 編.
“日本語観国際センサス単純集計表（暫定速報版）”,
国立国語研究所, 1999.
- [5] 井上史雄. 日本語の値段. 大修館書店, 2000.
- [6] 国立国語研究所. “日本語観国際センサス”.
https://mmsrv.ninjal.ac.jp/n_census/,
(参照 2018-11-01).
- [7] 総務省統計局. “国民経済計算”.
<http://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2018al.pdf>,
(参照 2018-09-07).
- [8] National Science Foundation. “Science & Engineering Indicators 2018”.
<https://www.nsf.gov/statistics/2018/nsb20181/>,
(参照 2018-09-07).
- [9] フィリップソン・ロバート(著)・平田雅博・信澤淳・原聖・浜井祐三子・細川道久・石部尚登(訳).
言語帝国主義—英語支配と英語教育. 三元社,
2013(原著 1992).
- [10] グラッドル・デイヴィッド(著)・山岸勝榮(訳).
英語の未来. 研究者, 1999(原著 1997).
- [11] 中央調査社. “個人オムニバス”.
<http://www.crs.or.jp/survey/omnidiv.html>
(参照 2018-10-30).